

# 「巻き込まれ准尉の番外編」「供養」

作 藤次郎政秀

●プロローグ、故人を想う心

HG達の世界にも、死者に対する葬儀・供養があります。その盛大なものは、年に一度、夏至を挟んだ一週間の間に皇国では先祖を敬う祭りがおこなわれます。

その他、個別に故人を想い、墓参り等を行うことがあります。

●猪狩り

『IA、そっち行ったよ!』

と、IAの着けているインカムにTYの指示が入った。

「はいな、姐さん!」

と言って、IAはライフルを構えた。森の下敷の中をガサガサと音を立てて何か近づいてくる気配がした。(こっち、来た!)と、IAは、音のする方にライフルを構えて、呼吸を整え、引き金に指を掛ける。すると、目の前の敷の切れ間に猪が出てきたのを見て、引き金に掛けた指を絞った。

途端に銃声が轟き、目の前の猪が静かに倒れた。

「仕留めた!」

と思ったのも、つかの間：敷の切れ間にもう一頭の猪が飛び出してきた。

「エッ、ナニ?もう一頭いたの!」

と驚きつつ、IAは慌ててライフルのボルトを操作して、次弾を装填し、引き金を絞った。しかし、慌てて狙いをつけたため、IAの撃ったライフルの弾は外れた。猪がIAに向かって突進してきた。

「キヤー」

と言いながら、ライフルのストックを使って、猪の鼻に一撃を加えると、猪は怯み後ずさりをするが、再びIAに向かって突進しようとした。

そこに、別の銃声が響き、猪はその場に倒れた。

「IA、大丈夫ですか？」

藪の間から出てきた人物を見て、IAは

「…IY」

と言った。

HGは、Y市から猟友会を通して、最新畑を荒らす質の悪い猪が出ると言うので駆除してほしいとの依頼で、Y市の山間部に来ていた。

罾を仕掛けても、それに掛からず。畑を荒らしているのだそう。

HGは、息子娘達の訓練も兼ねて、出発した。

「IY、助かった。ありがとうね」

「IA、ケガは？」

「うん、ないわよ」

そこに、

「IA〜！」

とTYの呼ぶ声が聞こえてきた。そして、IAとIYの姿を見つけると、近づいてきた。

「あっ、姐さん」

二頭の猪の前に居る二人に対して、TYが

「IA、やったじゃないの！それも、二頭も」

と嬉しそうに言うと、

「あつ、一頭はあたしですけど、もう一頭はIYが仕留めました」

と、IAはIYに向いて言った。それに対して、

「そうなの？IY」

と訊ねると、IYは控えめに

「はい」

と返事をした。TYは訝しげに、

「…でも、IYの配置は、もっと北側なのにどうしてここに？」

「はい、准尉の命令で」

「准尉が？」

「はい、私は准尉とHY姐さんと共に、配置に着くために川沿いを昇ってきましたが、TY姉さんが、IAが居る方向に猪が向かって行ったと言うのを聞いて、准尉が私をIAの応援に向かわせました」

と向かわせました」

「そうなんだ、じゃ、わたしがIAに言ったのと別に猪が居たんだ…で、准尉達は？」

「そのまま、川沿いを登っていきました」

「なんで？猪はもう、わたし達が仕留めたのに…」

「さあ」

と話していると、各自のインカムに

『散開して、身を潜めろ！』

とHGの声が入った。

「准尉だ！『散開しろ』って」

「えっ？なんで」

と言う、IAにIYは、

「とにかく、准尉の命令ですから」

「そうね。わたしはあつちに、I Yは向こう！ I Aはこの場に」

「はい」

T Y達がそれぞれ身を潜めると、

『装弾して、待機！』

とH Gの声が入った。T Y達は持っているライフルに弾を込めて構えた。

「行ったぞ、狼だから、身の危険がない限り発砲するなよ！」

「ハイ」

狼の群れは、I YとI Aの倒した猪を見つけると、それに群がった。

『状況は？』

「はい、倒した猪に狼が群がっています」

『そうか…静かにそこから退避』

I Y達は、H G達と合流した。H Yは

「あゝあ、猪二頭…完全に、狼に取られちゃってますね」

と、崖の上の安全地帯から双眼鏡を覗きながら言うと、A MとM Pも合流してきた。

「H Y姐さん、猪は？」

「狼の御馳走になったわ…」

と言って、H YはA Mに双眼鏡を渡した。A Mは双眼鏡を覗いて

「あー、晩飯のおかず…」

と残念そうに言った。

…こつちの世界の猟師の方や、ジビエ専門の解体業者の方に話を伺ったことがあります  
が、血抜きや行政手続きや検疫などの手間や、くくり罠や銃弾の当たり所によって、食べら  
れる部位が減る（くくり罠の場合は、罠にかかった足の血が固まって食用に適さないので、

足一本捨てるとか、銃弾が当たった場合は、鉛とかの影響でその付近一帯を捨てるとか言っていました）との事で、食べられる部位にして、食卓に上がるのは数日かかると言っていました。ま、HG達の世界の話ですので…作者

MPはHGに向かって

「ナニ？狼にあげたのカ？猪ヲ」

と、責める様に言うと、

「…違うわよ、仕留めた直後に、狼の群れが来て取られたの！」

と、IAがMPに言うと、HGが

「川沿いの砂地に、猪とは別に狼の足跡を見つけたので、警戒していたが、そっちに回り込まれた…抜け目がないな」

と頭を搔きながら言うと、TYが

「あ、准尉達が川沿いを登って行ったのは、それでしたか」

「…やむを得ん。現場写真を撮って、引き揚げて猟友会に報告する。猪鍋はあきらめよう」

「「はい…」」

と、皆落ち込んだ。

「あっ、准尉！」

「どうした、IY？」

「あの狼の群れの中に白い狼の子が…」

「ナニ？」

IYが指し示す方角に、HGは双眼鏡を向けると、猪に群がっている狼の中に白い毛並みの子供が居た。

「ほう、良く見つけたな」

「はい」

「わたしにも見せてください」

と言って、HYはHGから双眼鏡を受け取ると

「ホント、真っ白だわ」

「俺の爺さんの生まれたG県領地の地方では、白い狼は『山の精霊』として、見かけたら、幸運になると言い伝えがあり、銃を向けないそうだ。B県領地では、判らんがな」

「ワタシも見たい」

と、MPがHYから双眼鏡を受け取ると、

「次、自分」「その次わたし」「じゃ、そのつぎあたし」

と、AM、TY、IAが言った。

HGは、狼の食卓になっている状況を写真に収めると、

「ところで、誰が仕留めた？」

「はい、あたしです。あとIY…」

「そうか、二人共よくやった」

と、HGが褒めると、

「はい」

と喜んだ。IYはIAに、

「それにしても、IA凄いですね」

「なにが？」

「ライフルのストックを使って、猪の鼻に一撃を加えるなんて…」

「あ、あれ？夢中で…つい」

と言うと、TYが感心して、

「へえ〜IA、猪にライフルのストックで立ち向かったんだ」

「あつ、あれは、毎日姐さんと棒で訓練しているおかげです」

「猪相手に戦う事が出来るなら、もうわたしとやりあっても、わたしが、負けるかもね」とTYが言うと、

「いえ、多分姐さん相手だと、まだ後れを取ります」

「そうかなー、だって突進してくる猪だよ。わたしには無理だね」

「猪や、鹿とかは、子供の頃から見慣れているもので…急所も知っています」

「「エッ？」」

皆、IAの言葉に皆驚いた。TYがそれを受けて、

「あれ？IAの実家って、Y市のそれも白山亭のあるY国際港に近いところにあったんじや？」

「いやあくあたしのおじさんがよく、夜間に自分の運転するトラックに衝突した動物の死骸を載せてきたので…」

「「ナニ！」」

「それで、その翌日の晩は猪鍋とか鹿鍋とか…でも、一番多かったのは狸鍋でしたが」

「「そうなんだー」」

と、一同驚いた。

「…それにしても、くたびれ儲けでしたね」

と、HYが言うと、HGは、

「ま、畑を荒らす猪が居なくなったんだ、それで良しとしよう。明日は、店も定休日だ。皆帰ってゆっくりしよう」

「「はあ〜い」」

● 休日の朝

母屋：

I Yは、朝起きると、同室のH Yの姿がなかった。

「H Y姐さんは相変わらず、朝が早いなく、歳を重ねると朝が早くなるって言うけど…って、今日も准尉達と自主トレーニングしていたのか…」

と思つて、布団をたたみ、寝間着から部屋着に着替え、トイレと洗面を済ますと、一階の食堂に降りて行った。

食堂の食卓には、朝食の用意がしてあり、『最後の人、後片付けヨロシク！ H Y』と書かれたメモが置いてあった。

「あつ、今日は朝食の当番は、H Y姐さん…それに休日…だから、パン類とおかず類が置いてあるだけね…あれ？皆さん食べ終わっているのかしら」

と言いながら、食堂の時計を見ると、時間は朝の七時を回っていた。

平日なら、母屋に居る皆と男屋のS K、A Mと一緒に朝朝食を囲むのであるが、休日は、用意してある食事を各自採ることになっている。

テーブルの上にある皿の枚数は、残り一人分になっていた。I Yは台所に行き、流しを見ると、既に洗われている食器が置いてあった。

「…私が、一番遅いのか(汗)」

と、I Yは冷蔵庫を開け、牛乳とオレンジジュースを取り出し、それぞれコップに入れると、それを持って、食堂に戻った。

「今日のおかずは…サラダとスクランブルエッグ、それに…ま、いいか、私が最後だから、あるの全部食べてしまえば」

とI Yは、それらを別々の取り皿に自分で盛り付け、食べ始めた。H Yとかなら、そのまま大皿から直に食べるところであるが(笑)、そこはお嬢様育ちである…もつとも、最後その大

皿を含めて使用した食器を自分が洗う事になるのであるが…

I Yは、朝食を採ると、台所で皿とかの食器を洗い、水を切ると、丁寧に拭いて食器棚に戻す。そして、お昼の食事当番の確認のために台所のカレンダーを見て、

「あ、そうか。今日は休日だから、お昼はないのか…夜は、T Y先輩か…明日の朝食当番はI Aね。それにしても、静かね。皆さんお出かけているのかしら？」

と食堂から居間に移動して、新聞を広げながらあたりを見回すと、見えるのは、奥の部屋に居て相変わらずニコニコと笑っているHGの曾祖母と祖父母達の霊だけ…

「皆さん、何か用事があるのですね。私は、ないのでどうしよう…ここで、留守番していますか」

と独り言を言っってはみるものの、ふと寂しさが込み上げてきた。

「あ、准尉達男屋に居るのかも…准尉に組手の稽古をつけて貰おつ」と言っつて、I Yは玄関から男屋に向かった。

男屋ガンスミス工場…

「おはようございます」

「あ、I Yおはよう」

と男屋のガンスミス工場の作業机にI Aが居た。

「I A、休日に何やってんですか？」

「うん、ゲーム作ってるの」

「ゲームですか？」

「そう、仕事とまったく関係ないけど、准尉に話したら、『休日にPC使うのは構わんぞっつて』

「そうですか…」

「あ、丁度良かった。IYちょっとやってみてくれない？」

「私がゲームですか？できないですよ」

「大丈夫よ、シューティングゲームとかじゃないから、反射神経は必要ないし」

「？」

「アドベンチャーゲームと言って、ゲームのキャラクターに指示を与えて物語の進行を決めたり、その都度出てくるイベントをクリアするゲームだから、考えてキャラクターに指示を与えるだけよ」

「…それなら、私にもできそうですね」

「じゃ、決まり。ここに座って」

と言って、IAはIYに席を譲ろうとするが、

「私…准尉を探してきたんですけど…」

「あら、准尉なら出かけたわよ」

「どこにですか？」

「帝都って言ってたけど…AM兄さん連れて、車じゃなくて駅に向かったわ」

「…そうですか」

「准尉にナンの用？」

「組手の相手をお願いしたくて…」

「組手の相手って…今日は休日よ。あなた、准尉だったまにはのんびり出かけたいわよ。

准尉に相手して貰いたかったら、もっと早起きして、早朝の准尉達の朝練に出ればいいのに

…休日だからって、惰眠をむさぼっているあなたが悪いのよ」

と、IAが呆れて言うと、IYはムツとして

「IA、あなただって、いまPC使ってるじゃないですか」

「あたしがPC使ってるのって、仕事じゃなくて遊びだもん！言いがかりよ」

「趣味と実益ですか」

と、I Yが喧嘩腰に言うと、I Aは怯みつつも、

「実益って…あたし、ゲームでお金稼ぐ気ないし。ゲームのシナリオ考えたの、H Y先輩だし…」

と言うが、I Yは

「でも、P Cでゲームをプログラミングしているから、プログラミング技術の向上を狙っているじゃないですか！」

と、言ったので、I AもI Yに対して挑発的になり、

「だったら、I Y。あなた准尉相手にしなくても、庭で組手の型でも一人で練習してればいいじゃない！」

「言いましたね！」

「言ったわよ！それが何か？あゝ、あたしを怒らせて組手の相手でもさせよう？」

「…違います」

と言った所で、

「オイ、二人共、朝からナニ騒いでやがる！」

と、工場の奥にある部屋からS Kが顔を出した。

「「あ、軍曹…」」

「折角の休日なんだ、静かにしてくれ…昨夜H Gの奴と飲んだ酒がまだ残っていて、頭が痛いんだよ」

と、あくびをしながらS Kが言うと、

「「スミマセン…」」

と、I YとI Aは、S Kに謝ってから、

「あゝあ、軍曹に叱られちゃった！」

「スミマセン…」

「ま、あたしも共犯だから」

「…そうでしたね」

「IY、准尉出かけちゃったけど、あんたどうするの？」

「IAの言った通り、庭で組手の型でも練習します」

「ア、それ冗談だからね…IY(汗)」

「…ところで、HY先輩は…あ、休日だから、港町署の道場で子供達相手に稽古か…私も、行こうかな？」

「行ってきたら？」

「でも、行くと子供達の相手させられるから…体術はともかく、その後の子供の話題についていけないですし…」

「あいかわらず、リア充じゃないわね」

「…それは、否定しません。MPは？」

「D国大使館へ…MZさんに呼ばれたって」

「そうなんですか…喧嘩でもしに行ったのでしょうか？」

「あつ、それありえる(笑)」

「…組手の相手になりそうな人達が、皆さん出かけているので、IAの作ったゲームをします」

と言って、IYはPCの前に座った。それを聞いて、IAは、

「相手にならなくて、悪かったわね(怒)！」

と言って、むくれるが、IYがその気になったので、

「じゃ、初めて」

「は、」

「まずは、キャラクターの設定。名前入れてね」

「名前ですか？」

「そう、ゲーム中はその名前で呼ばれるから」

「…誰でもいいのですか？」

「そうよ」

「じゃ、＼IA＼とでも…」

「別にいいけど…(苦笑)一旦ゲームが始まると、途中で変えられないわよ」

「そもそも、どういうゲームなんですか？」

「そうね、HY先輩が書いたシナリオに従って行動する…これって、ある意味恋愛シミュレーションなもの」

「れ、恋愛って…」

「あ、大丈夫よ…別に准尉と恋に陥る話じゃなくて、准尉を探し回って出会ってご馳走して貰ったり、買い物に付き合ってもらったりするヤツだから」

「…それって、デートでは？」

「そうかもね…HY先輩の妄想が詰まったシナリオだから(苦笑)」

「…アハハ(苦笑)」

「でね、時間制限があるの、一日…って言っても、ゲームの中の時間であって、実際の時間じゃないけどね。イベント毎に経過する時間が決められていて、そのイベントが終わると、自動的に時間が消費されるわ」

「ゲームの終了条件は？」

「ゲームオーバーは、基本はないわね…一日かけても准尉と出会わなければ、ゲームオーバーかな？運が良ければ、朝から准尉に出会えて、色々してもらったりできるわね」

「色々ですか…」

「そう、色々…」

「いいですねー」

「チョツと、I Y妖しい目つきになってるけど、変な事、想像しちやダメよ…って、そんなイベントなんて、そもそもないけど」

「…そうですか」

と言って、I Yは項垂れた。

「じゃ、始めます」

と言って、I Yはゲームを始めた。最初の画面で

「あら、ゲーム画面…場所は、母屋なんですね。良く描かれていますね」

「あつ、それ写真を加工した背景だから」

「そうなんです…あら、誰か来た…あれ？HY先輩かな…この絵は誰が描いたんですか？上手いですね」

「キャラクターのデザインは、HMさんとその同僚の人。それをPCに取り込んで、綺麗な線画にして着色したのは、TY姐さんとMP、AM兄さんも一部やってくれたわね」

「私以外、総出ですね…私だけ仲間外れ…」

と言って、I Yはむくれた。

「だって…I Yあなた、最近までIMさんの事務所からの依頼で、IMさんちに、泊まり込みの警護に行ってたじゃないの」

「あつ…」

「それでね、HY先輩が『I Yが任務から帰ってきたら、警護任務のイベントを追加しよう！』って言い出して…HY先輩、あなたから、警護任務の事聞き出すつもりよ」

と言うと、I Yは

「だったら、警護任務のノウハウが学べるアドベンチャーゲームを作ったら、どうですか？皆さんの参考になりますし」

「…それ、同じことHY先輩が言ってた。政府要人警護については、AM兄さんがシナリオ作っているわ。…でも、『IYはIMさんの警護任務に就くと、遊びに行くとか勘違いしてなかなか戻ってこないから、参考にならないぞ』って准尉が言ってたわね」

「あっ…アハハ(苦笑)」

と、IYが画面を見ていると、

「…ここで、選択肢が出てきましたね。『挨拶する』『無視する』『戦う』…って、『戦う』ってなんですか？上の二つは判りますけど」

と言いながら、IYは画面のHYに対するコマンドを選択しようとした。

「アレ？朝の挨拶だけなのに、『戦う』って出ているわね…早速バグだわ…メモしとかないと」

「ここで、『戦う』を選択すると、どうなるのですか？」

「…わからない。そもそも、出てきてはいけないコマンドだもの」

「じゃ、選択してみます」

「チョット、IY」

IYは『戦う』のコマンドを選択した。そうしたら、いきなり「バトルモード」とタイトルが画面に出て、格闘ゲームに切り替わった。それを見たIAは

「えー、対戦ゲームの画面になっちゃった！」

「なんですか？さっきあなた『反射神経は必要ない』と言っていましたよね」

「そうよ…これは、TY姐さんが作っている格闘ゲームの画面だわ」

「なんですと？」

「えー、なんで姐さんのゲームが起動するの？あたしのゲームでは『戦う』って、じゃんけ

んとか、謎解きとか、漫才とか、盤ゲームの相手とかだし…」

「それでは、おかしいですね」

「IY、ゲームを一旦終了して」

「…どうやって？」

「強制終了コマンド…いや、この場合強制タスク終了ボタンを…」

「なんですか？それ」

「チョットどいて！」

「はい」

と、IYはIAと席を交代した。IYは、IAがPCの画面と格闘しているのを見て、ふと、

「あつ、私お店に行かなきゃ」

と、言つて、IYは虚ろな顔をして、男屋を出ていった。

「チョツ、IY！」

● IYの思い出

「え〜ん、え〜ん…」

「どうした？お嬢ちゃん」

と呼びかけられたので、IYは声の主を見ると、HGが居た。それも、いつものスーツではなく、古い、皇国政府軍の軍服を着ていた。それを見て、IYはHGが古い軍服を引っ張り出して着ていると思ひ、

「あつ、准尉：帰って来たんですね？」

と、顔を上げて言うと、HGは首を傾げて、

『准尉』？」

と聞かれて、IYは（あれ？准尉にしては、なんか若いな〜）と思いつつ、後ろにあるお店

のウィンドーに映っている自分の姿を見ると、I Y自体が幼女の姿になっているのに気づいた。

「あれ？」

「お嬢ちゃんのパパに、似ているかな？」

と聞かれ、I Yは（これは、幼いころの私の記憶？…それとも、まだI Aのゲーム？）と思  
い、

「ゴメンナサイ」

「ハハ、そうか、間違えられたか…でも、もう暗くなる。ここに居たら、人攫いに攫われるぞ！」

と言うが、I Yは、

「おじさんも人攫いでは、ないのですか？」

と言り返す。

「ハハ、そうかもしれんぞ〜」

と言って、HGはわざと脅かすと、I Yは急に心に寂しさが沸き上がり、自然に泣き出してしまった。

「エーン」

それを見たHGは、慌てて

「チョツと脅かしすぎたかな？ごめんねー、おじさん、このお店の人の孫で、HGって言うんだけど…」

と言って、I Yの座り込んでいる店の看板を指した。そこには「ミルクホール白山亭」と書いてあった。I Yが最初HGに連れられてHYと来た時に見た看板が掛かっていた。

「…『ミルクホール白山亭』って、ここは…」

と呟くと、I Yは（…やはり、これは、私が幼い頃の記憶？確かに、その頃に迷子になった

記憶はあるけど…場所はY国際港商店街だったかしら…この後、おかあさんが入院するようになった…だとすると」と考えた。

「お嬢ちゃん、どこから来たの？」

と、HGに尋ねられ、IYは当時母親と住んでいた場所の

「…帝都」

と答えた。

「そうか、帝都からココに観光に来たのかな？お父さんとか、お母さんと来たのかな？」

「…はい」

「そうか、きっとお父さんとお母さんが心配して探しているね」

「おとうさんは、死んじゃった（父上は、生きていらしたけど、当時、おかあさんからそう聞かされていたわね）」

「そうか、じゃ、お母さん？」

「はい」

「実は、その角に行くと、交番が見えるんだ。行ってみるかね？」

「はい」

と言って、立ち上がろうとしたが、足に激痛が走った」

「痛い！」

「…どうやら、足を痛めているようだね。そら、おいで」

と言って、HGは背を向けて、手を後ろに回した。IYは（准尉：私をおぶってくれるんだ、だったら、遠慮なく）と思って、HGにおぶさった。HGはIYをおぶって立ち上がると、駅前のロータリーに向かって歩き、国道の交差点に付くと、

「ほら、あそこに交番があるよ」

と、指さした。

HGは、IYをおぶったまま、駅前のロータリーを回って交番に着いた。交番の警察官がHGに気づいて、

「あつ、どうしましたか？軍人さん」

と言った。それを聞いたIYは（准尉って、まだここいらでは、知られていないんだ…）と思った。HGは警察官に

「この子、ロータリー向こうのお店の前で蹲って泣いていたんだ。迷子の連絡とか入っていない？」

と、HGは背中 of IYに振り返って言うと、警察官は

「さて…まだ本官は聞いていませんが、署（港町警察署）に問い合わせてみましょう…お嬢ちゃん、お名前は？」

「…IY」

「歳はいくつかな？」

「…三さい？」

と言った、IYの出した指はなぜか二本だった…

「IYちゃん、三才ね…誰とここに来たの？お父さん？お母さん？」

「…おかあさん」

「そう、じゃ、こっちにおいで」

と警察官は、IYに降りる様に促した、

「この子は、足を挫いている様なんだ」

と言って、HGがしゃがむが、IYはHGの背中から降りようとしなかった。

「大丈夫だよ、本官がすぐお母さんを見つけてあげるから、それまで交番に居ようね」

「イヤ」

と言って、IYはHGにしがみついた。

「…ハハ、すっかり懐かれてしまってますな」

「ハハ(汗)」

「降りないと、この人が困っているよ。降りてくれないかな？」

「イヤ！」

IYのはっきりした拒絶の意思に、HGは困り顔で、

「あ、俺、あそこ〃ミルクホール白山亭〃の店主のお婆さんに会いに行くから、店で預かって貰うよ」

「〃ミルクホール白山亭〃の女将さん…HMさんとどういうご関係ですか？」

「孫なんです。HGと言います」

「…そうでしたか(汗)、ではお願いします」

「じゃ、お店に行こうか」

「ハイ」

IYは(あつ、当時のお店に入れる)と思った。HGは交番を後にして、来たロータリーを戻り、白山亭のドアを開けた。

「こんにちはー」

「いらっしやいませ…あら、坊ちやま」

と、女給服を着た女性が応対した。それを聞いたIYは(准尉は、ココでは〃坊ちやま〃と呼ばれてたんだ)と笑いを堪えていた。そして、(女給服の制服も…当たり前か、この方は私達の先輩になるのね…って、この人確か、駅前純喫茶店の女将さんじゃないの！そう言えば、お店(白山亭)を再開する前に勉強しに行ったときに、そんな様な事言ってたっけ。開店当初手伝ってもらったのも、そういう事なんだ)と思った。

バーカウンターから、

「おや、G。いらっしやい」

と声がかかる。I Yが見ると、そこには洋服に割烹着姿のだいぶ腰の曲がった老女が…それは、I Yが毎日の様に母屋で遺影のある居間に座ってニコニコしている老女…H Gの祖母H Mの霊と同じ人物が居た。

「こんにちは、ばあちゃん」

「Gや、背中におぶっている女の子は…まさか」

「ハハ、違うよ。ばあちゃん。相変わらずだなあ…俺が子供を連れていっていると、すぐ曾孫かとかけて…、俺は、まだ独身だよ。この前も、兄貴の子供を連れてきたら、『おや、Gや曾孫かい?』と言ってたけど、曾孫は曾孫でも兄貴の娘のH Mだから…曾孫は合ってるけど、まるで俺の娘の様に言っただけなのやめて」

「そりゃ、あたしはお前さんの子供を早く見たいからさ…だから、わざと言ってるんだよ」と言ったので、I Yは(准尉の漫才って、おばあ様の直伝なんだ)と理解した。

「それよりも、この娘。足を怪我しているようなんだ」

と言うと、H Mは意地悪くH Gを見て、

「どうせ、お前さんが、追いかけて転ばせたんだろ?その強面で…すみませんねえ…孫が」とH MがI Yに言うと、I Yは返答に困り、黙り込んだ。H Gは慌てて、

「ばあちゃん、違うよ。店の前で蹲ってたんだよ」

「どれ、見せてごらん」

H Mは、H Gが椅子に降ろしたI Yに近づき、I Yの足を見ると、

「あら、捻挫しているようだね。これ、湿布薬を持ってきて」

と傍に居る女給に言うと、女給は「はい、女将さん」と答えて、バーカウンター裏にある救急箱を持ってきた。

H MはI Yの足に湿布薬を貼ると、

「素人療法だから、後で医者に行っただけで見て貰っておくれ」

「ありがとうございます」

とIYが言った。HMはハタと

「あ、今休診時間だから、あの人呼ぶかね…」

と言って、バーカウンターに戻ると、電話をかけて

「もしもし、〃白山亭〃のHMだけど、JCさんチョット来ておくれよ。いや、孫のGが女の子をケガさせて…(HGが「チョット、ばあちゃん!」と言う)足を挫いたみたいだから、見て欲しいんだ…えっ?『ウチは内科・小児科?』そんなのどうだっていいよー、嫌なら、外科の先生よこしておくれ!」

と言うと、電話を一方的に切った。そして、IYの元に戻ると、

「今、お医者さんが来るからね。待つてる間、何か飲むかね?」

「い、いえ…」

「なに、あたしのご馳走するよ。遠慮なくお言い」

と言われ、IYは(准尉のケチは、この人からではないんだ…准尉も、おばあ様みたいだったらいいのに…)と思った。

…違います! HMはHGがIYを怪我させたと勘違いしているだけです。店の商品を提供する事で、怪我させたことをごまかそうとしています(笑)作者

「遠慮しないでいいよ」

と、HGも言うと、IYはテーブル上に立てかけてあるメニューの表紙にある、〃クリームソーダ〃の文字が目に入り、

「…私、クリームソーダが飲みたい」

と言うと、HMは

「アハハ、子供は正直でいいやねえ…じゃ、Gや、お前さんはコーヒーでいいよね?」

「はい」

その会話から、I YはH Gがよく人に「お前さん」と言うのは、この人の影響を受けていると思つた。

I Yが店内を見渡すと、店の中は薄暗く、中には客が自分達の他に誰も居なかった。店員は、年老いたH Gの祖母のH Mと、女給が一人だけ：I Yは、以前H Gからこの店がH Mの代で一度閉店した話を思い出した。

やがて、H M自らがテーブルにクリームソーダとコーヒーを持ってきた。そして、

「はい、お上がり」

と言つた。I Yは、この店で初めてクリームソーダを飲んだ。今まで、店で作ることはあつたが、飲んだことはなかつた。(懐かしい味：つて、今、私は子供なんだつけ：ココでクリームソーダを飲んだ記憶がないけど、忘れていたのね。私が作るクリームソーダつて、この味になっているのかしら：戻つたら、確かめてみようつと)と思つた。

「ところで、Gや、お前さん今日は軍服着ているが、どうしたんかえ？」

とH Gに訊ねた。I Yも気になっていた。

「嗚呼、五年位前かな？政府軍の任務でC国とN国の戦線に行った折に、持つてつたハーフトラックと迫撃砲を現地に置いてきて：半年前に停戦になつたら？それで、部隊から『現地から回収して来い』って命令を受けて、これから、またC国に行つて、回収しに」

「おや、そうかい。またC国にねえ…」

「平和になつたし、俺が部隊で扱っている車両は特殊だから、現地のC国にあげる訳にはいかないんだよ。だから、明日、C国に行く輸送船がY海軍基地から出航するから、その前にばあちゃん達に挨拶しようと思つたんだ」

「そうかい。じゃ、爺さんに会つてきな。男屋のボイラー室に居るから」

「判つた、チョット行つてくる」

と言って、HGはバーカウンター横の従業員出入り口から出て行った。

それを見ていたIYは（おばあちゃんっ子なんだ…准尉って。五年前のC国の戦線って…と、すると、准尉のおばあさまが白山亭を閉店したのは、このすぐ後…それと、准尉が皇国政府軍をリストラされるのも…）と思った。

その時、白山亭のドアが開いて、白衣の女性が往診鞆を持って入ってきた。

「いらっしやいませ…って、先生どうしたの？」

と言う女給に対して、HMが

「あつ、来た、来た！JCさん、こっちだよ」

「なんなのよー、おばちゃん。あたしは内科・小児科なんだけどって…確かに患者は子供だね」

と、HMが指すIYの姿を見て言うと、IYは（「J」姓…って、この人はHMさんを『おばちゃん』と呼んでいるから、HMさんのお母さんのINさんの子供の系統の人ね…あ、この人、近所の内科の先生じゃない！あまりにも若くて、ビックリした）と思った。

「お前さん、小学校で保険医もしてるじゃないか、子供の怪我ぐらい治療してるだろ」

「そうだけど…で、この娘？」

「そうだよ、見てやっておくれ。お代は、コーヒーでいいね」

「…ったく、おばちゃんたら…お店の商品を治療代金に充てるのやめてよ」

との会話で、IYはこの時、HGのセコさも、祖母譲りなんだと思った。

JCは、IYの足に貼られた湿布薬を一度剥がして、IYの足首を手で探りながら、

「痛かったら、言ってね」

と言うが、IYは痛くて声が出なかった。

JCは一旦剥がした湿布薬を貼り直して、テープを張って固定すると

「おばちゃんの治療で正しかったよ」

と言っつて、

「軽い、捻挫だね。腫れ上がる様なら、外科に連れて行ってね」

とJ Cは言った。それを聞いて、I Yは（この時代って、結構いい加減だなー）と思った。

その時、またドアが開いて、

「いらつしやいませ…あら、交番のお巡りさん」

と、女給が言うと、警察官は女性を一人伴っていた。一緒に居るのは、亡くなったI Yの母親の姿だった。

「あ、おかあさん！」

と叫ぶと同時に、懐かしさのあまり涙が込み上げてきた。H Mはその涙を、今まで一人でいた寂しさと、母親に会えた嬉しさの涙とおもい。

「あ、あそこにいるのが、お嬢ちゃんのお母さん？」

「はい」

I Yの母親も、泣いているのが自分の娘と認識して、警察官と一緒にテーブル来ると、I Yを抱きしめ、

「嗚呼、Y…よかった。どこに行ってたの？Y国際港の大栈橋を見に行った帰りのバスから降りた途端、目を放した隙にいなくなって…おかあさん探したのよ」

と言うと、警察官は

「このお店の前で、蹲っていたそうです。そこに、このお店のお孫さんが通りかかり、保護しました」

と言うと、I Yの母親は、

「ありがとうございます」

と、H Mに言うと、J Cが。

「この子は、足を挫いて居ます」

と言った。IYの母親は白衣を着たJCに対して、

「お医者様、ありがとうございます…お代は…」

と、口を濁すと、HMは

「なに、孫のGが怪我させたみたいだから、いいよ」

と言った。JCも、

「あたしも、おばちゃんに言われて観ただけだから…後で外科の先生に見て貰って…あたし、内科・小児科だから」

と言った。IYの母親は

「エッ？そんなんですか」

と、驚くと、IYは自分が足を挫いた時の事を思い出し、（あく、おかあさんを脅かそうと、ロータリーから、国道を渡った後で、自分が勝手に転んで足を挫いたのを、准尉のせいにされてる…これは、誤解を解いとかなないと、准尉が悪者にされてしまう）と考え、

「…あのおく私、そのどぶ板の隙間に足が挟まれて、勝手に転んじやったの！」

と言うと、HMは驚き、

「ナニ？孫のGが追いかけて転ばせたんじゃないのか？」

「…はい、ゴメンナサイ」

と言って、IYは謝った。

「嗚呼ー、良かった。孫がよそ様の子に怪我をさせたんじゃないよ…」

と言って、HMは安堵した。そして、IYに

「お母さんに会えてよかったね」

「はい」

「ま、良かった、良かった…お母さんも安心したろ、コーヒーを丁度淹れたばかりだから、飲んでおいき…なに、あたしの驕りさね」

と言って、席に着くように勧めた。それを聞いて、IYは（…そのコーヒーって、准尉に出す予定のコーヒーよね…まだ、本人口をつけていないけど…セコッ）と突っ込みを入れていた。

IYの母親は、席に座ると、店内を見回して、

「駅前なのに、静かで落ち着いたお店ですね」

と感想を言うと、HMは

「そんなんじゃないのよ、あんた。Y国際港の大栈橋に行ってきたんだろ？」

と言うと、IYの母親は驚いて、

「はい、そうですが」

「あそこに行くのに、そのロータリーからバス使ったろ？」

「は、」

「昔はね、駅から歩いていける距離に港の栈橋があったんだよ。それが、港の改良工事で、港の施設が遠くに移転したおかげで、港の大栈橋を利用する人は、皆、そのロータリーからバスを使っていくようになったんだ。最初は、市電のレールを敷設する話もあったけど、港の再開発中に立ち消えになった。ま、おかげで、駅前の商店街は、廃れるばかりさね…あたしも、もう年だ…このお店の今の儲けと先行きを考えると、あたしの代で終わりだね。ここにお店を構えたかあさんに申し訳が立たんが、近々お店を閉めようと思ってるんだ」

と、HMがしみじみと言うと、IYの母親は、

「…そんな、勿体ない」

と、言うが、HMは

「ま、ココに来る常連連中もそう言っているが、譲ろうと考えている娘は嫌がってるし、娘は独身で、子供も居ないし、息子の嫁は、”ここは、幽霊屋敷だ”なんて、騒いで息子を連れて出て行ったきり…顔も見せに来ない…せめて、孫のGが継いでくれたら…と思うん

だけど。あの子は、兵隊稼業が好きだしねえ…」

と、悲しげに言った。それを聞いたIYは（おばあ様は、准尉にここを継いで欲しいと考えていたんだ。この後、二十数年後に准尉がこのお店を再建させたのは、この辺りに住むINさんの子孫達の悲願もあるけど、HMさんの願いでもあったんだ…あと、「幽霊屋敷」は、ある意味本当なだけど…」と感じ、あと「見える人」のIYは、HGの母親について心の中で弁護した。

「…そんな、ご事情が…私ったら…ゴメンナサイ」

と、IYの母親は謝ると、

「なに、謝ることはないよ。これも、時代さね…なので、遠慮なく飲んでおくれ、あたしが淹れる最後のコーヒーとクリームソーダになるかもしれないから…」

と言つて、HMは悲しげに笑った。

IYの母親は、IYが飲んでいるクリームソーダを見て。

「あら、赤いクリームソーダなんですね。このお店は」

「そうだよ、ウチは、先代…つて、あたしのかあさんなだけど…その時からこの色なんだ」

「そうでしたか、いえ…他のお店は緑色なので」

「使ってる、シロップがメロン味のシロップつてことさね。ウチはイチゴ味のシロップを使ってるからね。よく聞かれるよ」

「そうなんですね。Y…よかったわね」

「うん」

「その、上のアイスクリーム。お母さんに、チョット頂戴」

「うん、いいよ」

IYは、飲んでいるクリームソーダを母親にそつと、差し出すと、母親は自分のコーヒー

スプーンで、アイスクリームを一匙すくって、コーヒーカップに入れると、

「ありがとう、Y」

と優しく微笑んだ。IYは（嗚呼…この後、おかあさんは、アパートで倒れて入院して、癌が見つかって…）と、悲しい気持ちになったが、目の前で微笑んでいる母を傷つけまいと、精いっぱい笑顔をした。

「IY…IY…」

と呼ばれたので、IYはハツとすると、そこは白山亭の店内のバーカウンターの席だった。

「IY、どうした？お店の女給服なんか着て…今日は定休日って、昨日話してなかったか？」

とHGに言われて、IYは自分の姿を見ると、女給服を着ていた。

「ハッ！私は…」

と言って、驚くIYに対して、IAが

「もうじき、お夕飯だと言うのに、母屋に居ないから、准尉と探しに来たのよ」

「IA…私は…確か、男屋でIAの作った、ゲームをしていて…」

「それって、今朝の話じゃない」

「今朝って…」

「もう、夜の七時よ」

「エッ？」

「そう言えば、IYあなた、あたしのゲームでバグを見つけて、それが元で『お店に行かないきゃ』と言って、出て行ったきり…一体、お店でナニをしていたの？」

「…判りません。私は、IAのゲームをしている最中に、気分が悪くなって、部屋に戻ったところまで覚えていますが…」

「どうした？それから…」

と、訊ねるHGに

「その後の記憶が…どうやら、ココで夢を見ていたようです…子供の頃の事です」

「そうか」

「IY、あなた日頃からこのお店で働いていた女給さん達の霊を見るから、ひよつとしたら、憑依されたんじゃないの？」

と、IAが恐る恐る訊ねると、IYは

「…そうかも、しれませんねえ」

と言って、周囲を見回した。そうしたら、店内に居る女給服姿の霊達が笑っていた。それを見てIYは（あつ、あの人達の悪戯…それにしても、准尉とおかあさんとの思い出を…ありがとうございます）と思った。

HGはバーカウンターのの中に入り、二人に

「何か飲むかね？」

「いいんですか？准尉」

と、IAが言うと、

「IA、お前さんも、店のメニューの味くらい知らないとな…」

「はい」

「では、准尉。私にクリームソーダを作ってください」

とIYが言うと、HGは訝しげに

「〃クリームソーダ〃？どうした？」

「い、いえ…お店では作りますが…」

「そうか（まだ、飲んだことないのか）」

とHGは考え、クリームソーダを作った。

「はい、どうぞ」

と言って、バーカウンターに出された、クリームソーダを見て、IAは

「そういえば、前から気になっていたんですが、ココのクリームソーダって、赤いんですね」  
「そうだよ」

「クリームソーダって、ソーダの色は、緑色じゃありませんでしたか？」

「大抵の喫茶店ではね…白山亭は昔から、赤いイチゴシロップを使うんだよ。緑色のメロンシロップを使ったのが多いのは、見栄えと、当時メロンが高級品だと言う観点からじゃないかな」

「そうなんですか？」

「ソーダの色付けは。カキ氷用のシロップを使うんだ。昔は赤と緑しかなかったからな。ウチは夏場には、カキ氷はイチゴ味しかなかったから、シロップは赤色しかない」

「なんで、赤のみなんですか？」

「嗚呼、それは…昔は、カキ氷にイチゴ味のシロップをかけた後、トッピングでアイスクリームとかイチゴジャムを乗せていたからね。緑のメロン味だと、メロンつけないといけないから…メロンって高価だしな」

と、HGが言うと、IAはすかさず

「セコ！」

と言って、IYは

「そうなんですか！（確か、准尉のおばあ様は、先代のひいおばあ様から受け継いだと言っていたけど、そう言う理由もあるんだ）」  
と驚いた。

「今では、シロップの種類と味が増えて、最近では、青いのか、黄色いのか、ピンクなんてえのものもあるから、今の夏場のウチのカキ氷は、コーヒーシロップとか、甘酒を掛けたのを

含めて、色とりどりにしているな。その分、トッピングは追加の別料金にしたけど」

「ですね」

「あと、こんなものもあるよ」

と言って、HGが出したのは、青いクリームソーダ。

「青いのもあるじゃないですか」

「これは、ブルーキュラソーを使った、大人用…Pub営業の裏メニューだよ」

「エッ？」

「だって、ブルーキュラソーって、お酒だから子供には出せないだろ」

「そうですね」

と、IYとIAが納得すると、IAはバーカウンターにある、青いクリームソーダをバーカウスターに手を掛けて、下から覗き込むようにして見ながら、

「IY、あたし青いのが飲みたい」

とIAが言うと、IYは

「いいですよ。私はこの赤いのが飲みたかったのですから」

「…そうなんだ」

「はい、幼い頃にこの店に来た時に飲んだ思い出の品ですので…」

とIYがしみじみと言うと、

「ナニ？IYお前さん、ココに来たことがあるのか」

と、HGが驚くとIYは（准尉は覚えていないんだ…）とあって、

「はい、かなり昔の事で忘れていましたが、先程の思い出…夢ですかね。その中で、私はお店で准尉のおばあ様を作ってくれたクリームソーダを飲んでいました…。社会人になって、家を出されてから初めて入った喫茶店で、クリームソーダを注文したら、緑色のが出てきて驚きました」

「カルチャーショックって言う奴？」

とIAがIYの話から受けて言うと、

「そうですね。私の中ではクリームソーダは、赤いソーダのままでしたから(笑)」

「ハハ、俺も幼い頃、ココで祖母の出す赤いクリームソーダに、ショックを受けたっけ…聞いたら、『あんたのひい婆さんの時代から、ウチはこれだ…』なんて言われたっけ」

と、HGが言うと、IYは夢の中のHMの言葉を思い出した。

「じゃ、もう一つ」

と言って、HGはバーカウンターにリキュールグラスを置いて、バースプーンで器用に数種類のリキュールを注いでいく。最後に生クリームを乗せて、

「はい、これが“エンゼルキッス”と言うカクテルだ」

「綺麗…五層になってますね」

「お酒の比重で綺麗に分離して層を形成するんだ。他に七層の“レインボー”というカクテルがあるよ」

と、HGが言うと、

「では、それはわたしが頂きます」

と言って、HGの後ろから手が出てきた。

「「HY姐さんー！」」

とIYとIAが驚く間もなく、HGの作った“エンゼルキッス”のグラスはHYの手に取られていた。

「HY、なんで店に？」

と、HGが訊ねると、

「晩御飯の支度が出来たから、TYに准尉達を呼んできてと頼まれました。部屋にも男屋の

工場にもいなかったもので、出かけているのかと思ったら、お店の従業員口が開いていて、不思議に思っただけなら、三人共中でドリンク作って飲んでるんだもの」

「そうか、じゃ皆、それを飲んだら、夕飯だ」

「「ハイ」」

I Yは母屋に戻る途中で、

「あっ、准尉のおばあ様の淹れたコーヒーを飲むの忘れた…」

と、母親が飲んでいた、白山亭二代目オーナーである、HGの祖母HMの淹れたコーヒーを一口貰えばよかったと、後悔した。そして、IAの肩を叩き、

「あなたのゲームでは、准尉に色々して貰えなかったけど、お店で見た夢では、准尉と准尉のおばあ様…それから、私のおかあさんに、いい事をして貰いました」

と言うと、IAは振り返って、

「エッく、なにそれ？」

と言った。

夕食後、I Yは居間の奥部屋に行き、そこで相変わらずニコニコと笑っているHGの祖母の霊に向かって座り、小声で

「今日は、ありがとうございます。私の亡くなった母との楽しい思い出を見せてくれて…それから、今日は母の命日と言う事をすっかり忘れていました。親不孝な悪い娘で…申し訳ありません。次の定休日にはお墓参りに行ってきます」

と言った。

●幽霊拳銃

B 県領地警察学校…

I Yが講堂の舞台上がり、ノートPCを講堂のプロジェクターに接続し、  
「それでは、講義を始めます」

と言って、頭を下げた。この日、碓屋はB県領地警察学校から、拳銃の扱いについて講義をする依頼を受けた。警察学校の担当教官が実家に不幸があり、普段「特別銃器携帯・使用許可証」の「限定解除」の要員が居て、港町水上警察署、港町警察署を始めとする各地の警察署や関係組織でガンシューティングのインストラクターをやっている縁から、HGに依頼の連絡が来た。HGはこの際、娘共に経験を積ませるために、I Yを派遣した。

I Yは顔を上げると、生徒の中に一人の人物を発見し、いきなり

「エー、そこにいる部外者さん。退出願います！」

と一言、講堂に居る警察官候補生の中の人に向かって言った。

I Yの視線の先に居るのは、港町水上警察署の捜査官K J…本人は、自分の事とは判らず、周囲をキョロキョロしていた。

「そのの、あなたですよ(怒)港町水上警察署のK J捜査官！」

と、I Yが言うと、K Jは自身を指さして、

「エッ？僕？」

『『僕？』ではありません。なんであなたが警察学校に居るのですか？それとも、署から』警察学校に戻って勉強し直してこい！』と、捜査本部長か署長に言われたのですか？」

と、語気を荒げつつ、I Yが言うと、K Jは

「あー、それ半分当たっているかも…君の後の「捜査」について教えに来たから」

『『教えに来た』のですか？「教わりに来た」の間違いでは？」

「そんなら、僕だって、港町水上警察署の敏腕捜査官だよ。捜査のイロハは教えられるさ」

「ナンですと？ホントですか？「敏腕」と言うあなたの評価の言葉は、初めて聞きました

たが…私からは「鈍感」と言う評価です」

と、I YとK Jの掛け合いに、周囲の警察官候補生は笑いを堪えていた。I Yは候補生の反応に気づき、

「あっ、講義の冒頭に私情の話が入りました事をお詫びします。では、講義を始めます…まず、拳銃につきまして、その分類は大きく二つに分かれます」

と言つて、I YはノートPCを操作して、

「…この様に、拳銃は『リボルバー装填』方式と、『自動装填』方式とに分かれます。この『装填』と言うのは、拳銃の弾丸発射時に、弾丸の供給方式の違いによります…」

と、話し始めた。

別の日、港町水上警察署射撃場…

この日、I YとH Yはシューティングインストラクターとして、港町水上警察署の射撃場に居た。

I Yが本日の訓練受講者に対して、礼をして、

「では、今月の射撃講習を始めます…つて、なんでまた、あなたがそこに居るのですか？ K

J 捜査官！」

と言うと、そこに居る人達は一斉に、K Jに視線を向ける。

「あっ、俺も射撃講習を受けに来ました。I Y教官」

「なんですと？…ナニが『射撃講習を受けに来ました。I Y教官』ですか。貴方はこの申し込みリストには載っていませんか？」

と語気を荒げて言つて、イライラして手に持っているボードを叩く。K Jはそんな事を気にせずに、

「休んだ同僚のS F捜査官の代理です…」

と、平然と答えると、「(あちゃ、こいつが申し込んでいないのを確認して来たのに！)」

と、I Yは額に手を当てて呟いた。そこに、作業台で作業をしていた、H Yが来て、  
「I Y、どうしたの？」

「…いや、名簿にない参加者が居るので」

と言って、I YがK Jを指さすと、H Yは、

「あら…ホントだ。なんで居るのですか？」

「ハイ、僕は欠席した同僚の代わりです」

と言うと、H Yは名簿を確認して、

「料金貰ってるから、教えてあげなさいよ」

と言って、肩を落としているI Yにニヤニヤして肩をポンと叩き、作業台に戻った

「エーッ」

と、I YはH Yに振り返って言うと、H Yは一言

「払い戻しには、応じないわよ」

「は…い（准尉に似て、セコくなったなあ…(汗)」

と言って、I Yは渋々訓練指導を始めた。

母屋食堂…

その晩、帰宅したH YとI Yは夕食を囲みながら、

「まったく！先日の警察学校と言いつつ、なんであいつが？」

と、言うと、H Yが

「あら、あなたがK J君を避けるから、彼なりにストーキングの手を変えてきたのでは？」

「でも、成りすましをしてまで…」

「いや、そうじゃないわよ。S F捜査官は、ご実家に不幸があつて急遽勤務を休んだそうだから」

「誰から聞きましたか？」

「AKよ。あの娘も今日の講習に参加していたから…」

と、HYは答えると、続けて

「あなたKJ君に対して、あんな教え方することないじゃない」

と、IYを責める口調で言った。それに対して、

「…それは」

IYが口ごもると、HYは

「料金を貰っているから、お客様よ。店内では、あなたの行為については、何も言わないけど、銃器の訓練は別よ。一つ間違えば事故につながるのよ」

「はい」

と言って、IYは項垂れた。

そこに、HGが作業着姿で来るなり、

「おい、HY」

「はい、准尉」

「今日水上署（港町水上警察署）から預かった拳銃は、（ガンスミス）工場のコンテナケースに入っているのです、全てか？」

「ハイ、そうですが…何か？」

「一丁多いぞ！」

「嘘！（銃器）保管庫から持ち出す際に、伝票と合わせて、IYとチェックしましたが…ねえ、IY？」

「はい、預かった拳銃は十丁ですが」

「十丁？伝票は九丁だぞ！」

「チョット、伝票を貸してください！」

と言って、HYはHGから伝票を受け取り、枚数を数えると、

「アッ、ホントだ！大変」

と言って、慌てて食堂を出て行った。HGとIYが後を追いかけた。

男屋ガンスミス：

「おっ？HYどうした？慌てて」

「軍曹（SK）、今日水上署から預かった拳銃のコンテナケースは？」

「そこ」

と言って、SKは、作業台の横を指さした。その後から、HGとIYが入って来た。

「どうした？HG」

「いや、伝票と拳銃の数が合わないんだ」

「エッ？どつちが？拳銃か？伝票か？」

「拳銃…」

「なら、帳票上の間違いか…もう一度、伝票と拳銃を合わせてみな、HY」

「はっ」

と言って、HYは、作業台にコンテナケースを置くと、鍵を開け、拳銃を手に取り拳銃のシリアルナンバーと伝票の記載を確認して、拳銃の上に伝票を置いてゆく。その後ろでHGと

IYも確認していく。

「アレ？伝票と拳銃の数は合ってます」

「何だと？」

HGとIYは、HYの作業を後ろから見ている。

「じゃ、准尉の勘違いと言う事ですか？」

「そくなるわね…」

と言って、H Yは、H Gをジト目で見る。

「俺かよ！」

「「そ〜ですよ〜！」」

「H G、伝票の見間違いか？めくる時に重なったかよ」

と、S KまでH Gを睨む。H Gは

「いや、そんな事は…今、H Yがやったことと同じ事をしたんだが…」

「でも、伝票と拳銃の数は同じですよね！（怒）」

「食堂でチェックしたときは、九枚だったよな？」

「…そうですけど、この通り、伝票と拳銃を合わせてみたら、十丁分ありましたし…私も准尉も伝票をめくり間違えたとか」

と言うH YにH Gは素直に

「…はい、スミマセン」

と謝った。H YはI Yに

「数があったから、行こう！I Y」

「はい」

母屋に戻る途中で、H Yが

「そうそう…B S A TのN Aから聞いた話だけど、あなた警察学校でK J君と『夫婦漫才』やったんだってね」

と、ニヤニヤして言うと、I Yは顔を赤らめ、

「なんですと！違います」

「あら、そうなの？N Aの話だと、息の合った漫才だったって…」

「な、なんでN Aさんが…」

「警察候補生の中に、NAの妹さんがいたんだよねー(笑)」

「ナンですと！」

「なので、警察学校での出来事は、既に准尉にも知られているからね、IY」

「え〜」

数日後、碓屋ガンスミス工場：

「IA」

機械操作をしているIAに作業機で伝票をファイルに入れ替えているSKが呼んだ。

「はい、軍曹」

機械を止めて、SKの居る作業机に来たIAに対して、SKは

「水上署の拳銃の定期点検が終わったから、返ってきて」

「はい、分かりました」

IAはガンケースを抱えて、港町水上警察署の銃保管庫で担当の係官に

「こんにちは、碓屋ガンスミスサービスです。先日お預かりした定期メンテナンスの拳銃を  
持ってきました」

「おや、IAいらっしやい」

と言って、係官は伝票を捲る。

「ひい、ふう：九丁だね」

と言って、伝票を見せると、IAも預かり伝票と合わせて確認して、

「はい、そうです」

と言って、コンテナケースを開けた。その中にある拳銃と伝票に記載されている拳銃のシリアルナンバーを確認して、一致した拳銃を保管庫の作業台に伝票の上に拳銃を置いてゆく。係官も置かれた伝票と拳銃を確認して、受け取り伝票にチェックを入れていった。そして、

「はい、確かに九丁。確認しました」

と言って、伝票に受領印を押した。それをIAに

「はい、ご苦労様です。またお願いします」

と言って渡すと、IAは

「はい、毎度ありがとうございます。今日はメンテナンス作業の用事がありますか？」

と訊ねると、

「嗚呼、今日の所はないね。また次回の射撃講習の時に頼むよ」

「はい、ありがとうございます」

IAはガンズミス工場に帰ると、SKに

「軍曹さん、水上署の定期点検の拳銃、納品してきました。九丁納品です」

「あれ？九…確か十丁だったはず」

「エッ？そうなんですか？水上署の拳銃保管庫の係員の人と、いつもの通り受注伝票と納品伝票と拳銃本体、それに向こうの持ち出し伝票と返却伝票を一丁分ずつ作業台に置いて、係官の人とチェックをしましたが…何か間違った事したでしょうか？」

不安顔でSKを見るIAにSKは

「それで、手順は合っている。コンテナケースには九丁しか入っていなかったんだよな？」

「はい…」

「向こうの係官もこちらに九丁出していると言う認識だよな」

「はい…」

「別に、お前を責めてるわけじゃないから、ハッキリ言ってくれ」

「はい、確かに九丁でした。向こうの人も確認しました」

「…ふむ、IA、HGを呼んできてくれ」

「ハイ、軍曹」

I Aは母屋に行くと、縁側から

「准尉、軍曹さんが呼んでます」

「ん？どうしたI A」

「はい、水上署からメンテナンスを受けた拳銃をさつき納品に行ったのですが、数がおかし  
いと…」

「ナニ？」

H Gは縁側の杢脱石にあるサンダルを履き、I Aと男屋に向かった。

男屋ガンスミス工場…

「S K、I Aから聞いたが、水上署の拳銃の数がおかしいと」

「嗚呼、先日お前が伝票より拳銃の数が多いいと言った奴だ」

「あれ？でも、ここでH Y達と伝票と拳銃を合わせたら、十丁あったよな」

と言うH Gの言葉にI Aが反応して、

「エッ？さつき水上署に納めたら、九丁でしたよ！向こうの銃保管庫の係の人と、持ち出し  
伝票とこちらの預かり伝票と現物と合わせて、チェックして受領印を貰いましたから」

「I A、向こうの持ちだし伝票の写し（伝票はカーボン伝票で、水上署の拳銃保管庫の主伝  
票と一致している）を」

「はい、これです」

I Aが渡す伝票を、H Gは書庫にある「港町水上警察署 受発注伝票」と背表紙のある  
ファイルを開いて、それと突き合わせていった。H Gの後ろから、S KとI Aがそれを覗き  
込んでいた。

「いち、にい、さん…きゆう。九丁だな、伝票もこちらのファイルでも…」

「ナンだ？それじゃ、この前俺達は何を見たんだ？」

「I A、H Yを呼んでくれ」

「はい、准尉」

やがて、H Yが女給服姿で入ってきて、

「准尉、お呼びですか？」

「先日の水上署から預かった拳銃：確か十丁だったよな？」

「…はい、そうです」

「さつき、I Aが納品してきたら、九丁だったそう」

「エッ？でもあの時…」

「そうだな、ここで確認したよな」

「はい…もしかして、紛失か盗難…？」

「いや、向こうの係官もこっちに九丁出した認識になっている」

「はい？では、ここでわたし達が見たのは？」

「一丁幽霊と言う事だな」

と、S Kが言うと、幽霊嫌いのH Yの顔が蒼くなった。

「マジっすか？」

I Aも蒼くなった。H Gは腕組みして暫く考えると、何かを思いつき、

「…さて、ここに居る四人の記憶力テストだ」

と言った。

「記憶力？」

と、S K達は首を傾げた。

「そうだ、紙の伝票は九丁だが、このP Cの中のファイルには、拳銃のシリアルナンバーと型式、メンテナンスの受付と返却日付、交換部品等の経歴と、他に線条痕と外観写真が入っている。伝票から、今回受けた拳銃を抽出して、その外観写真と記憶を紐づければ、十丁目が

判ると思うが…」

「でもよ、H G。伝票は九枚だぜ」

「いや、ファイルから受けた時の日付…多分十丁分あると思うが…」

「うむ…ま、やってみるか」

「だな」

と言つて、H Gはファイルから検索を始めると、出てきた結果は九丁…

「あれっ…」

H GとS K、それにH Yが首を傾げた。

「おかしいな…あの後、伝票を見ながら、受付日付を入力したはず…」

「だな…珍しく、お前が声出しながら、P Cに入力してたもんな(笑)」

と、S Kが言うと、H Gは

「そう言えば、拳銃のメンテしたのは？俺とI Aか…」

「はい、そうです」

「I A。メンテしたときの交換部品とかの記録とかP Cに入力したよな」

「はい、准尉の整備した拳銃については、添付されたメモを見て…ハッ、そう言えば、入力途中で、ファイルが固まって…」

「えー、やっぱり幽霊拳銃！」

と言つて、H Yは卒倒しかけた。

「その時のファイル操作は？I A」

「はい、拳銃のシリアルナンバーを打ち込んで検索を掛けた時です。最初入力ミスかと思いましたが、再度入力・検索して、出てきた拳銃のシリアルナンバーと画面の表示を比較して間違いない事を確認しています」

「それだな…」

「嗚呼…」

「准尉…それに、軍曹さん何か判ったのですか？」

「I A、そのシリアル番号判るか？最低下三桁…」

「あつ、ハイ。全部は覚えていませんが、下三桁位なら…」

「それで、ファイル検索を掛けてくれ」

「はい」

I AはP Cの前に座り、ファイルの検索欄にシリアルナンバーの下三桁を入力した。その結果、五丁の拳銃が検索に引っかった。

H Gはその五丁の拳銃のファイルを調べると、その内四丁が自動拳銃、一丁がリボルバー拳銃で港町水上警察署の備品であつたが、既に廃棄処分になつてた…それを見て、H Yはその場にへたり込んだ。

「H Y、そつちの椅子に座つてろ！」

「はい、准尉。すみません」

「I A、間違いないか？」

「はい、軍曹さん。多分…」

H Gは、リボルバー拳銃のファイルにリンクされている拳銃の写真を開いた。

「見た事のない古い拳銃ですね…こんな古くても使っているんですか？」

拳銃の写真を覗き込むI AにS Kは

「警察は故障が少なく、動作が確実なリボルバー拳銃を使っているからな、だから、古い拳銃もあるのだが…それでも、今皇国の警察が使用しているリボルバー拳銃は、確か型式もA国のが一種類と国産が二種類…この拳銃は、警察がとうに使用を辞めた先の大戦で使われたリボルバー拳銃だ」

「あれ？そうだっけ？俺、この型の拳銃を整備したぞ」

「いつだよ、HG」

「え〜と、おととい…」

とHGが言った途端、後ろの席に座っていたHYが「イヤー！」と言って、口から泡を吹いていた…それを見てSKはHGに

「…とりあえず、こいつ（HY）片付けよう」

「そうだな」

と言って、HGはHYを背負い、母屋に向かった。そして、戻って来た時にIYを連れていた。

「なんだよ、お嬢（IY）を連れてきたのか？」

と言うSKに、HGは、

「いや、何か『見える』かと思って…」

「いくら、お嬢が『見える』からと言って、PCのデータには霊は憑いていないだろう…」

と呆れて言った。

「まあ、軍曹さん。私でお役に立てる事があれば」

「そういや、HG。おめえこの型の拳銃整備したった言ったよな？」

「おう…」

「どこにしまった？」

「あそこのお客預かりのガンラック…」

と言って、HGはそのガンラックに行くと、鍵を開けて、

「はい…」

と言って、その拳銃を取り出した。HGの後から来たSK達は

「『確かに、写真に写っている型…』」

と言って、驚き、S Kは、

「そいつのシリアルナンバーは？」

と訊ねた。H Gは

「こいつのシリアルナンバーは…と、皇〇××一中×△…」

と読み上げると、S KはP Cの画面を見つめ、

「こいつだ！ 皇国兵器廠、中央工場製の奴だ。かなり以前に廃棄処分になっている」

「そこって、今の正規軍中央兵器廠の銃器研究所の工場だったな」

「そうだ…政府軍時代、何度も行った工場だ」

「准尉、知っている所ですか？」

と訊ねるI YにH Gは

「そりゃ、任務柄、皇国兵器廠とは…よく、開発中の銃器を借りたりしてテストしたもんな」

「嗚呼。海外の競合する銃器との比較なんか頼まれたりしてな」

と言って、S Kが頷く。H Gは

「じゃ、これの整備発注元の検索。I A頼む」

「ハイ、軍曹さん」

I AがP Cを操作すると、件の拳銃の整備受注履歴が出てきた。

「え〜と、先日です…」

「ホントか？ この拳銃が警察で使われなくなって、もう十年以上経っているぞ！」

「ですが、この通り…」

その間、I Yは拳銃をじっと見つめていた。それに気づいたH Gが

「I Y…何か感じるか？」

と言われ、ハッとしたりしたI Yは

「…そのなんですか、この拳銃に、なんて言うか…」

と、I Yはあれこれ考えながらたどたどしく言うが、やがて

「あつ、T Y先輩の部屋にある刀…それに近い雰囲気を感じます」

と言った。それを聞いて、H Gは

「確か、T Yの刀の入った箱書きには『皇王家から拝領した太刀』と聞いているが…T Yは『ご先祖様には時の皇王様に仇なす一族や魍魎魍魎を退治した人達が居ます』とも言っていたが…何か宿っているのか？」

「そこまでは、私には判りません」

その時、H Gのスマートフォンに着信があった。相手は、港町水上警察署の署長…

「はい、H Gです」

『あつ、そちらのガンミスに古い拳銃がウチの署から行っていないかね？皇国政府軍で採用されたりボルバー式拳銃』

と言われ、H GはS Kと顔を見合わせると、

「はい、それらしき拳銃はここにありますが…」

『良かった、警察学校から借用した拳銃が返ってきていないと連絡があつて…』

「ナニ？」

「その拳銃のシリアルナンバーは？判りますか？」

『嗚呼、ここに警察学校から預かったときの伝票がある。〃皇〇××一中×△…』

「あ、それですね。今日の前にあります」

I AがP Cを操作して、拳銃の所在を確かめると、港町水上警察署となっていた。I AがP Cの画面を指さすのを見て、H Gが

「ですが、保管場所はお宅になっていますよ」

『あつ、それは…その拳銃。もう十数年前のウチの署員が使っていたんだが、殉職してね。』

使用していた拳銃は、皇国兵器廠で製造された最後のロットの拳銃で、貴重なために警察学校に資料用として寄贈したんだ。年に一度の殉職者の供養のために、毎年警察学校から借用して、その時にお宅に整備を依頼して、その後返却していたんだ』

と言うと、受注伝票を捲っていたIYが、港町水上警察署のファイルではなく、〃B県領地警察学校 受発注伝票〃と書かれているファイルに件の拳銃の受注伝票を見つけた。それを渡されたHGは

「今、伝票を確認しました。確かにB県領地の警察学校の伝票で整備を受注していますね」  
『それ！それが、そもそもの間違い。いつもはウチで整備の発注伝票を切るのを、警察学校の教官…この人、その殉職した署員のお子さんなんだけど、気を利かせて、向こうの整備発注伝票を作成してウチに渡したもんだから、ウチの銃保管庫担当の係官がそのままそっちに渡した。で、今日の返却された拳銃を受領した係官は別の人物だから、ウチの伝票を見てウチが発注した分を受領したと…』

それを聞いて、HG達は「「アッ！」「」と思った。

「判りました。その拳銃はこれから持ってそちらに伺います」

『ありがとう…見つかってよかったよ』

「そうですな、お互い」

HGは通話を切ると、その場に座り込んだ。SK達も安堵の表情を浮かべた。

「IA」

「ハイ」

「この拳銃のファイルを修正。保管場所は〃B県領地警察学校〃、整備発注は〃港町水上警察署〃、使用用途は〃教育資料ならびに殉職者供養用〃とでもしておいてくれ」

「ハイ」

「I Y」

「はい」

「母屋に行つて、H Yの事の次第を伝えておいてくれ…俺はこの拳銃を水上署に納品してくる。拳銃には、殉職した水上署署員の魂が宿っているとでも言っておいてくれ」

「はい、准尉」

「…これで、一件落着だなH G」

とS Kが言うと、H Gはため息をつきながら、

「そうだな」

と答えた。それに対してI Aが

「准尉、なんでファイル検索をした時に九丁しか抽出できなかったのですか？」

「最初検索した時に、検索キーワードは『受注日付』と『港町水上警察署』と『廃棄は除く』にした」

「はい」

「そうしないと、I Aの話から、ファイル検索が途中で止まると思つて…今、他の受注もあるから、ファイルを壊したくないのでね」

「そうですね」

「検索キーワードを『受注日付』だけとすると…」

と言うH Gの言葉にI AはP Cを操作すると

「あつ、十丁目が表示されましたね」

「そういう事…最初から検索キーワードを『受注日付』だけにしておけば、こんなに時間は掛からなかった…普段はT Yやお前さんが、同じ日に方々の警察署から拳銃を預かつてくるから、いつもの癖で、P Cのファイル検索のキーワードを絞り過ぎたんだ。ここまで騒

ぎを大きくしたのは俺自身だ。更に、水上署から持ってきたコンテナケースから、中の拳銃を、全部作業台に出しちゃったもんだから、全数把握せずに、整備後の拳銃を伝票を頼りに、コンテナケースに戻したもんだから、警察学校の拳銃をはじいちまった：ま、元々受け入れた後、伝票の発注先もロクに確認しなかった、俺が悪い：とりあえず、各受注先専用のコンテナケースを増やして、そこから取り出して作業して、戻す事にしよう」

と、HGは反省しながら言うと、SKも

「まさか廃棄した拳銃を整備するなんて思わなかったからな」

「そうだな、いらぬ先入観が邪魔したな」

●エピローグ、

皇国での夏至を挟んだ一週間の間、先祖を敬う祭りの後：

HG達は、白山亭の定休日に港の岬に連なる丘の中腹に展開している共同墓地に行った。そして、ある墓の前で立ち止まり、そこに持参した花束と供物を捧げた。

「准尉、ここは？」

今年碓屋に入った、AMが訊ねると、

「ここにはな、白山亭の母屋と碓屋で亡くなった女給や娼婦達を埋葬している。当然、創業者の俺のひい婆さんと、婆さん夫婦も眠っている」

「そうでしたか」

「例年の夏至の一週間の先祖を敬う期間は、ウチは書き入れ時だから、こうして終わった後に、墓を詣でているんだ。店が忙しいから、こうして今の時期に詣でも、ひい婆さん達は許してくれるだろうよ」

とHGが言うと、HGとHY達は、その場で膝づいて手を合わせた。

「さ、准尉。お蕎麦食べに行きましょう！」

とHYが言うと、IY達も

「いいですね」

「お蕎麦ですか？何かあるのですか？」

と、AMが訊ねる。

「嗚呼：俺の爺さんがG県領地の出でね。農家の三男だったから、Y海軍基地での徴兵後も実家に帰らずに、ウチ（ミルクホール白山亭と娼館碓屋）にボーイラーマンとして雇って貰ったそうさ。その爺さんの実家では蕎麦の栽培が盛んで、爺さんは蕎麦が好きなんだ。そのG県領地の蕎麦粉を使った蕎麦を出す店がこの近所にあって、爺さんも食べに行ってたそうさ。供養の意味も兼ねて、墓参りの後はその店で蕎麦をたぐっているのさ」

巻き込まれ親父の番外編「供養」 Ⅱ完Ⅱ